ミオヤの光

天尊の巻

一、天　尊……一
三、法身の如來の德……二
三、報身の如來の德……六
四、四　智（大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智）……七
五、三　德（神聖、正義、恩寵）……一三
六、應身の如來德……二八
七、眞如とミオヤ……二四
八、法性法身と方便法身……三九

天　尊

如來本一體なれども三身に分る。三身各天尊にして如來の德を行したまふことを畧述せん。

法身の說に就ても佛敎中其敎に依て必ずしも一定せぬ。殊に通佛敎の自力主義と今宗敎的の今敎の三身說は大に趣を異にす。通佛敎は哲學的にて汎神敎にて自性の佛を自ら發悟して自ら成佛す。故に法身と云ふも自己の本性を指す。報身と云ふも自己の積功累德の萬行に報いて、自己が佛と爲ること。應身と云ふも自己が佛となりての上の働を指すのみ。今宗敎としては主體と客體の關係にて全く宗敎的である故に、法身と云ふも客體なる卽ち一切萬有の本源、萬物を產出する大原則なり。法身は若しは波羅門敎のブラフマの如きの法體なり。但しブラハマ敎との異る所は、大乘佛敎の法身は宇宙萬有の因果法の根本たる一大原則にして、佛敎の因果法を通じて此因果法の一

大原則の本源としての法身佛である。又報身としても波羅門敎のビチユヌに類すれども　彼と佛敎の報身の異る處は報身無量光如來と云ふは世界唯一の大人格萬德圓滿の釋迦を通じて宇宙中心的大靈格の無量光如來を中心とす。また報身は應身釋尊の理想的觀念的に觀じたまふ客體なり。今敎は通佛敎の如く哲學に非ず。又波羅門敎の如く因果法を無視したる萬物の能生の者に非ず。大人格を離れたる靈的人格に非ず。故に宗敎にして且つ理究まれるものなり。

法身の如來德

法身の天尊とは如何なる法體なる乎。佛敎には宇宙萬有を說明するに必ず因果法を以て生成するものと說く。宇宙一として因果律を離れたる生物なし。此因果法と法身とはいかなる關係を有すとなれば、實に宇宙は天體の星宿より地上の一切の生物に至る迄悉く器械的にして又因緣因果の法に則らぬはない。此表面より見ゆる因果律に行はるゝ萬物を內觀すれば絕對なる實在者である。此宇宙の內觀の絕對の實在者として之を法身と名づく。一切萬法の本體の義である。法身は梵にビルシャナ、徧一切處の絕對の大靈態にして十方三世を包含して遺すことなく、其の本質に地水火風空識なる物と心との無礙の靈體にて一大妙色、此の六大に一切無盡の妙理を具足して遺すこと無く、絕對の大靈なれば一切知一切能の屬性を以て常恒に一切萬物を造化の法則としまた力として、一切萬物を建設し作爲す。是の働きが卽ち外より觀れば悉く因果的に萬物に關係をして居る。萬物の因果と內的の統一的體とは離るべきものに非ず。天尊とは天は自然に大靈妙の德、大威神力であり、眞理の源萬法の本源なれば天尊と云ふ。大にして天體の運行より地上の萬物に至るまで其の命令的に行はるゝ法身の法則に依りて萬物には動くべき性を有ておる。卽ち天何と言はんや四時行はれ百物生ず。是天尊の命令なり。一大天尊の分身たる一切萬物は各其分に應じて天尊自身の性を有て居る。太陽も天尊の分身として一切星宿の中心たり。衆生の個體は如何に小なるも

一大法身を縮小せる分身なり。故に一大法身に具する處の十界三千乃至一切の萬法は悉く此個體に伏在す。一切衆生には皆天地法界十界三千の妙理悉く具有す。宇宙全體の五大妙色心性此の一小五尺の中に具有せり。一切の萬法悉く法身の顯現たると共に法身の全一を具す。密敎に云ふが如くば、金胎法界曼荼羅塵數の諸尊は悉く一大天尊の分身にして兩部の塵數の諸尊は悉く大日普門の萬德身の故に本地法身徧一切處、有情非情山河大地草木叢林風聲水音虛空法界悉く天尊如來の德を行じて居る。

法身の天尊は絕對獨一の靈體にして一切萬物の內存なれば萬物如何に纖細の生物にも法身は離れぬ。一切の衆生は本法身を根本とし、また世界的の因緣國果の律に依て成り立てゐる。因果から出來た萬物の內面には法身の性を有つて居る。縱令愚昧な無器用な夫妻間にも子を造化するの妙用は有て居る。其の子の身體の構造組織の巧妙なことに至つてはいかに巧なる技師も細工することは出來ぬほど巧である。又植物にても其生理的にまた構造の巧妙な事は實に巧なる工師の企て及ぶことでない。そは凡ての生物には內存の法身あればなり。天地萬物悉く造化の妙用は何の處にも行はれざる無し。是れ法身無量無邊の分身が各々造化の妙用たる如來の德を行ひつゝあるなり。又生物の進化說によるも人類の進化の根元に遡れば卽ち微小なる生物卽ちアミンバの如く植物とも動物とも何れにも成り得べき性を有て居る生物が卽ち人類の祖先であると。其の原始的生物が無數の時間と無數の階級を經て漸々に人類に進化したるにあり。故に一切生物の起原は本同一であると。然らば原始的生物の單細胞生命なるアミンバ底の物にも頓て進化したる上には人類とも成り得らるゝ伏能を有て居たと云はねばならぬ。法華の常不輕品に、いかに現在惡人とても其に具せる佛性は頓て佛と成り得べき故に當來の佛として禮拜せりと。然らば一切の生物は當成の佛として皆尊とい。涅槃經には佛眼を以て衆生の頭上に各々佛が相好圓具して座したまふと說き玉ひたるも理に於て然らんと思はれる。一大法身佛が無邊の世界に無邊の衆生と分身して相應の働きを爲しつゝあり。一切衆生の佛性を開發して成佛得度せしむる德用を施し

玉ふは卽ち報身無量光の如來の德なり。

報身の如來の德

報身天尊は靈界の太陽なり。智慧と慈悲と威神との光明を以て一切衆生の心靈を開發し靈化し玉ふ妙用あり。是卽ち如來の德である。報身如來は光明遍照にて自然に衆生の心靈を攝化し玉ふ德用が備はつて居る。法身は天則の因果法の中に常恒に一切衆生を生產養成し玉ふ。自然の勢力を以て常恒に造化の妙用を爲してゐる。報身は法身から稟けたる衆生の奧底に有する靈性を開發する働きを常恒に行つて居る、之を報身の天尊と云ふ。

報身の光明が一切衆生を攝取し靈化し玉ふ光明に無量の德あり。今此を太陽のエネルギー光熱化の三線に比例せば、

如來の光　　太陽のエネルギー

智慧の光、——人の智力に啓示、——光線

慈悲の光、——人の感情に融合、——熱線

威神の光、——人の意志を靈化、——化學線

太陽が出て明るいのは光線なり。如來の光明は心光として人の精神を照します光明にて、如來の智慧光は太陽の光線に比し、慈悲は熱線に較べ威神は化學線に比す。

報身如來の衆生の生靈を攝めて靈化し玉ふ靈德の光明を太陽の三線に比すべし。今如來の四智三德を以て衆生を靈化し玉ふ。四智とは大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智是なり。衆生の心は眞の智慧が無くて識を以て觀察し判斷し認識し感覺して居る故に此の凡夫の識は此の自然界の方面に於ては事々物々に對して認識も判斷もするけれども佛智の境界は觀ずることも認識することも出來ぬ。

大圓鏡智

凡夫は小い我を本として天地萬物をば外界の物として觀察してをる。それで主觀と客觀との二つに見えて、人の精神が主觀にて外の萬物は有形の客觀と見えてをる。是が凡夫の現に觀つゝある世界である。夫が如來の大圓鏡智は宇宙一切の物質も心も同一の大智慧光明の中の物なれば如來は天地萬物を自分の智慧の鏡の裡の物と照し玉ふが故に、自分の心の外の世界ではない。故に現在も過去も未來も十方三世一切の淨土も穢土も衆生の形も心も有りと有らゆる事と物と心とすべていか成る物も如來大圓鏡智の中に炳然と現はれぬ物はない。故に衆生の識を離れて如來の大智慧の光に化せられて見れば十方三世の依正身心は悉く自己觀念界の中に歷然と現はるゝ。

平等性智

人間には個々に理性と云ふ智慧を以て物を判斷し識別する心を有て居る。然れども小さい我と云ふ物を此の體の中に有る物として其の理性の智慧から萬物を判斷し而して凡夫の理性は未だ充分に開發せぬ故に判斷が誤り易い。而して肉の我と云ふ物に種々の體質の關係を受けて性質が或は神經質また膽汁質粘液質の如きの性質を受けて我々と云ふ我の性質が萬人特殊的である。如來は個々の體質の性を超えて絶對の大我、大自覺平等一如の性を以て一切の自性本源を照して居るから平等にて、如々の智慧が如々の理に契合とは是である。宇宙絶對の自性を以て自我と覺し玉ふが故に眞理を照して誤がない。衆生が小我の迷妄であることを自覺して如來平等性智の光明に照さるゝ時は初めて自己の本性が佛なりと覺らるゝのである。萬法一如の理が悟らるゝ。

妙觀察智

宇宙法界には妙不可思議なる智慧の光明が徧照しておる。此の妙智慧の光明が佛と衆生との交感して衆生心を佛心と化す如き、また此萬物相互の關係は衆生を靈化し成佛させる計りでなく衆生界の方面にも其の感應の作用は現はれて居る。萬物相互の感

應の作用から造化の妙用を爲すことである。太陽と地球とまた陰と陽との二氣の相交はる處に萬物造化の用を爲す。雌雄の相愛相交する處に造化の用ある如く、また人類の知識にても人々は知能本有すとも若し師友等の敎の緣に藉らざれば知識開發せぬ。法界には相互に因緣の和合する處に發生もする、知識開發もする。斯樣な作用が有る故に自然界にも人事上の事も凡て和合する處に新しき物を發生する作用がある。之をすべて人間の認識に於ても然りである。哲學の認識に就ては獨乙の合理派と英國の經驗派とが永らくの爭ひも質は何れも片面の眞理は有れども全部の眞理でない。人間には本理性は有つて居る。又感覺性も有つておる。理性は有つても一たび感覺の經驗を經ねば理性は開けぬ。雌性のみでは子が出來ぬ如く、理性と感性との因緣和合より認識することも出來る。今斯妙觀察智は如來と衆生との心と心と感應の上に衆生の心を開きて覺悟させ玉ふ作用である。報身如來の光明は遍ねく照して衆生佛を念ずる時に智惠光が感應して竟には衆生の知見も開きて見佛し又悟を得るに至るの本である。衆生の心は雌性なれば如來の靈相は雄性の花粉である。夫が衆生信念の中に容ると始めて靈胎が結び初めたので、之が佛子の宿りである。斯の三昧の靈感は宗敎の生命の根本である。一人の爲に然る如く十方無量の衆生一時一念に念ずるも同時に感應す。密家にて如來と衆生との加持成佛の悉地を得る時に衆生の三業と如來の三輪と神祕的に冥合し入我々入の妙境卽ち生佛妙感靈應の三昧狀態。其時は歡天喜地八面玲瓏、其の內容の妙味は言語の斷へたる處、兎まれ此妙智が宗敎上の一大關捩にて此妙用にて靈に生かされまた成佛するに至る。

成所作智

凡夫の眼耳鼻舌身の感覺は凡夫の眼に視耳に聽き鼻に嗅ぎ舌に味はひ身に觸れて感覺を起すのは識と云ふ。之れ器械的の五官で外の色と聲と香と味と觸との識別を爲す。衆生の業識が種々に別れておる故に感覺も同じ樣でない。人類が如何に美と見るべき

衣服の如きも又美術の如きも猫杯の感覺には美といふ感じはなからう。凡ての事物に就て同じくない事は唯識論に一水四見の喩がある。そは一の水にても人類は水と見るものを魚類には空氣の如くに感じられ餓鬼には熱河と感じられ、天人には淨瑠璃地と見ゆるとの例の如し。萬物に對して各自の業識に依つて自分丈に見て居る。人類の瓦礫土砂の麁澁なる土地の山河大地と見ゆる處に於ても佛眼を以て見れば實に七寶莊嚴萬物晃耀として微妙奇麗なること限りなしと。維摩經に說き玉へり。其の心淨ければ卽ち佛土淨しと。又喩へば青眼鏡を以て見れば萬物悉く青色を呈するが如く、人の肉眼を以て見れば人類式に萬物が感覺し佛眼を以て見れば一切處として淨土ならざるはなしと。佛の成所作智は佛は自由にして念に隨つて境界を現す。若し意に悉く七寶莊嚴ならしめんとすれば忽ち七寶莊嚴の世界と現はれ、宮殿樓觀池流華樹乃至一切萬物悉く佛の意の如くに顯現す。眼に視る處の色、耳に聽くべき聲、鼻に嗅ぐべき香、舌に味ふべき味、身に觸るゝ處、悉く自由に顯現す。故に佛は理想が卽ち現實となる。衆生若し淸淨莊嚴の佛土を感せんと欲せば、凡夫の業識の感覺を捨て、佛の成所作智の中に入るべし。一切佛の感覺し玉ふ如くに至美靈妙の五妙境界を感覺することを得べし。凡夫の心は業識を以て萬事を人間式に觀念し、判斷し感覺し認識してゐる。若し人の業識に本づかずして如來大智光明の中に轉ずる時は此處も如來の妙境界不可說の功德を以て莊嚴せる蓮華藏世界と觀じ得べし。

如來の三德

如來が衆生に對する終局の目的は、一切衆生の道德的人格を父の完き如くに衆生の心靈を開發し靈化して佛敎に謂ゆる萬德圓滿なる佛に爲さん事にあり如來は一切衆生を子とし完全圓滿なる靈的人格を成就せしむることは父たる聖意である、一切衆生の心靈を養成するに家庭に於ける父母の如し。衆生に對する如來の靈德を三德とす。一神聖、二正義、三恩寵是なり。神聖と、正義とは子に對する嚴肅なる父の如し、恩寵

は慈愛に富める母の如し。

一 神聖

如來が衆生の道德的行爲を照鑑し玉ふ智慧なり。神聖と正義としての如來は嚴肅なる慈父の如くに衆生よりは感じらる。神聖と正義は道德律の根本にて神聖は行爲の光明にて善惡邪正を如實に照見せしむるの鑑なり。如來神聖は如實に衆生の三業を照見し玉ふ明鏡なり。故に我等神聖なる如來照管の鑑に向ふ時は自ら正しくするに至る。法華經に我常に衆生の行道と不行道とを知りて度すべき所に隨つて度すとは是なり。

如來の神聖と衆生の正見

衆生の行道を照鑑し玉ふ如來の智光は太陽の光の如くに外界より照すに非ず。絕對なる根底より人の直覺的正見(良心)とし囁き來る如來の命令なり。

眞理に犯す可からざる道德律の光明なる如來の神聖が衆生の正見と爲りて自己の行爲を返照す。我等が正見に對する如來の神聖は道德律の立法者にして亦司法者なり。如來の神聖が人の正見として世の所謂良心と現じて自己の行爲を判斷し邪正善惡を明かに照見して惡を排して善に就くべきやう命令す。

神聖と天命の性

如來は道德律の根底にして世に善の榮え惡の亡びる性の自然に有するは是宇宙の大法に善は理に叶ひ惡は稱はざるが故なり。若し又儒敎を假りて云はゞ人には天命の性として惡を避け善に就くべき性を具して居る。卽ち天の命之を性と云ふ性に率ふ之を道と云ふと。人は天命の性は正善なること水の卑きに流るゝ如くなるを、私欲なる者が本性に反して惡を作すと云ふ如く、兎まれ佛敎に謂ゆる人の心の本性は佛性にて自性淸淨なり。唯煩惱に覆はるる爲に本性に反して不道德を爲す。如來の神聖は衆生の本性の淸淨無垢の意見なる正見となり、之を顯はせば卽ち成佛なり。道德標準の神聖の光明は一切衆生を至善の神靈界に歸趣すべき航海の燈臺なり。人の意志は世の八風

の爲に動かされ私欲に偏りて正當を失ひ易し。故に人生の航路を進むに、神聖なる光明の下に自己の正見を以て之に順ふべし。然る時は有終の美なる光明の國に達すべし。正見は鑑の如く公平無私なり。また神聖は道德秩序を照す日光にて正見は如實に行爲を見る目の如し。道德律の根本は法性本然の理法にして諸佛も之を造作せず、千聖も之を改めず、是本然の常法なれば諸佛出世して此を衆生の爲に開示し玉ふのみ。

道德律の根本は神聖

如來は神聖にして道德律の根本なり。通佛敎にては有らゆる道德を束ねて持戒を以て道德の根本とす。戒は止惡作善の體なり。佛陀は大乘律に、道德律の根本として、梵網戒を說き玉うた。道德律は神聖にして犯す可からず、斯の本性本然の理法なれば佛出世し玉ふとも作善止惡の道德の法體は更に造りし物にあらず。故に釋迦自ら說き玉はず、本佛盧舍那之を誦し玉ふを、釋迦は百千萬億の佛陀と共に道德律を聽き玉うた。梵網經に『我今盧舍那蓮華臺に坐す。周匝せる千華の上に亦各千の釋迦を現ず。一華に百億國あり一國に一釋迦在ます。各々菩提樹下に坐して一時に佛道を成ず。是の千と百億とは盧舍那を本身とす。千と百億との釋迦が各々微塵の衆を攝して俱に我所に來至して我佛戒を誦するを聽いて甘露の門卽ち開く。是時に千と百億との釋迦還つて本道場に至つて各我本師の戒たる十重四十八を誦す。戒は明なる日月の如く亦瓔珞珠の如し。一切の菩薩衆是に由て正覺を成ず。是盧舍那誦し玉ふ。我も亦是の如く誦す。汝新學の菩薩頂戴して戒を受持せよ。是の戒を誦し已つて轉じて、諸の衆生に授くべし。諦かに聽け是正しく佛法中の戒藏波羅提木叉を誦すべし。大衆心に諦かに信せよ。汝は是當成の佛、我は是已成の佛なりと。常に是の如きの信を作さば戒品已に具足す、一切有心の者は皆應に佛戒を受くべし。衆生佛戒を受くれば卽ち諸佛の位に入る。位大覺に同じ己らば眞に是れ諸佛の子なり』と。是れ通佛敎にて道德の根本なる波羅提木叉(戒)は法性本然の理として千聖も易へず、萬佛も改める能はざる底の常法である故に諸佛の本佛なる盧舍那が有らゆる分身の釋迦を徵集して自ら道德律は

斯くなりと誦し玉ふて、聽かしめ此本然の常法たる道德法を以て一切に則らしむべき命令をしたまふた。此戒法は是一切衆生の佛性を開きて、天命の性たる本心と法界の等流の道德律とは合致すべき性德なり。本衆生には佛性なる道德心の本性を伏藏す。之を開發して道德心を活動させるに至る。此開發する契機を受戒の作法とす。此作法にて戒體が實に發得する時は道德心の光を以て身口意の作業法性の理に合ふ行爲を爲すに至る。戒を發得すとは、喩へば燭に火を點ずるが如く一度び燭に火を點ずる時は燈る如く、心意に燈りつゝある戒光は自己三業を照して如實の行爲を爲すを得。

宗敎的に云はゞ如來の聖意は、神聖にして神聖の光明に衆生の心靈開く時は、正知見の眼を開き、道德律を照す光明の中には自然と聖意に稱はざる邪と惡を去り、聖意に稱ふ正と善とに進むべきやう如來の命令が正見に囁き來る。又一切の邪と惡は闇黑にして正と善とは光明なれば、正しく神聖なる光明に向て行く人は自づと自己の邪惡を排して如來の神聖なる正善に進むべくなりぬ。

神聖は衆生の道德秩序を爲す如來の聖意にて人の正見を照らす光明なり。

二　正　義

神聖としては如來が道德秩序の光明にして正義としては、邪惡を排して正善に進ましむる原動力たり太陽が中心となりて惑星を正しく軌道の下に運行せしむる動力を與ふる如く、如來は一切衆生に對して道德秩序の中に正しく力行すべき靈力を與へ玉ふ卽ち正義也。人の方より云はゞ神聖が正見の眼を明すとすれば正義は衆生を正道に行はしむる足なり。

正義は邪惡を排して正善に進むべき性なり。世には惡は嫌忌せられ善は稱揚せらるゝ性を有て居る。そは邪惡は闇黑にして正善は光明なり。闇黑は如何に深厚なるも、光明には消滅せらるゝ性なり。すべての邪惡は正義の光明の缺けたる處に發する魔物なり。正義は眞善微妙に向つて向上する性を持つて居る。如來は眞善淸淨の國土を建

設するには排惡取善の正義を以てし玉へり。彌陀の四十八願を以て淨土を建設すとは是なり。彌陀は淨土を設立するに捨惡選善の本願(聖意)を以て就し玉へり。曰く二百十億の世界の中より、國土の麁を捨て妙を選み人天の惡を排し善を取りて有ゆる邪惡麁穢を捨て有ゆる正善微妙を選取して眞善微妙の淨土を建て玉へり。捨惡選善は是正義なり。善惡混淆正邪雜濫の處には淸淨土は立ち難し故に聖意に叶はざる邪惡不淨は悉く光明の中には消滅す。正義の光明は諦に邪惡を排して正善を選取する性能を有す斯光明は喩へば日光に病毒の黴菌を撲殺する力ありて或生物には活力を與ふる如く、彌陀正義の光明は衆生及び社會に害毒を及ぼす邪惡の黴菌を消滅して正善に活氣を與ふる勢力あり。

正義は衆生の精神界に在りては一切邪惡雜毒に對して奮鬪する勢力なり。社會に在りては社會を紊亂し、汚瀆醜猥また淫風弊習の毒素を撲殺するの能力なり。彌陀は正義の光明を以て一切衆生の靈に活き正善に力行し一切惡魔との健鬪に大なる勢力を與へ玉ふ。釋尊が諸の外道惡魔等に正法を宣揚して諸の邪道を推伏す。卽ち法鼓を扣き法螺を吹き法劒を執り法幢を建て法雷を震はし法電を耀かし法施を演ぶ。常に法音を以て諸の世間を覺せしむ。光明普ねく照らし一切世界六種に震動し、總じて魔界を攝して魔の宮殿を動かす。衆魔慴怖して歸伏せざる無し。邪網を摑裂し諸見を消滅し諸の塵勞を散じ諸の欲塹を壞す。法城を嚴護して法門を開闡す。垢汗を洗濯すること顯明淸白にして光く佛法を融めて正化を宣流すと。是正義の幢を建てゝ諸の邪道を摧きしなり。

正義は如來の聖意が行爲に現はす力なり。正義は千萬人と雖も我行かんと云ふ如き勇氣の加はる力なり。彌陀の正義は菩薩の意志として正道に立つて最善の努力を爲す經に聖意の加はりたる菩薩の意志を說いて「因力、緣力、意力、願力、方便力、常力、善力、定力、多聞の力、施戒忍辱精進禪定智慧の力、正念正觀、諸通明の力、如法に諸の衆生を調伏する力、如是等の力、一切具足せり」と。斯の如きの力は悉く如來の聖意を意として努力する處の正義の力なり。

三　恩　寵

如來が一切衆生を光明の中に攝めて、心靈を開發し正善に同化したまふ大慈悲卽ち恩寵なり。神聖と正義とは嚴父に例すべく恩寵としては慈母の愛に比すべし。喩へば世間に父母に依て子は養育せらるゝも初めは母の懷に於て育てられ又家庭敎養にも母に依て養はる而して靈の眼は開け行爲の足も發達するに至る。神聖に合ふ正見の眼正義の足も發達するに至る。本は恩寵の靈育を被むる故なり。如來の恩寵と衆生の信念との關係に就て聖善導は三緣の深密なる因緣あることを明し玉へり。三緣とは一、親緣。二、近緣。三、增上緣。是なり。此三緣は如來が十方一切衆生の父母として一切の子等を靈育愛化し玉ふ助成の强きことを示したるなり。如來は一切衆生の眞實の父母なれば無條件の恩寵を以て諸の衆生を攝取し靈化し玉ふ故に如來の大慈悲の光明は十方一切の世界に徧照して如何なる時いかなる處に於ても充滿せり。但し衆生の信念する處に於て攝化の益を被る。喩へば太陽が光熱化を以て萬物を照し化育する如くに如來が一切衆生の心靈を養育したまふ。此の恩寵を被むるべき衆生の方は信念なり。

一親緣とは如來を信念する心と如來の恩寵との最親密なること、譬へば子に乳房を哺ませる慈母よりも甚だし。されば聖善導が親緣とは衆生が念を起して口に聖名を稱ふれば佛は之を聞き玉ひ、身に敬禮し奉れば佛は之を見玉ひ、意に佛を念ずれば佛は之を知り玉ひ、また衆生が佛を憶念し奉れば佛もまた衆生を憶念し玉ふ。彼此の三業相捨離せず。故に親緣と名づくと。今謂ゆる親緣とは如來の大慈悲心と衆生が如來を愛樂する心の內容が融合して親愛の情が深濃となりて、而して從來の唯肉のみを愛して居し情が轉じて最高最美の最靈德の如來を親愛して益々愛念が進むに隨つて自己も如來の靈美の心に同化せられて靈感轉た極りなくして慈悲心にも富むに至る。如來を深く愛念し奉るが故に愛化す。之を親緣と名づく。

二、近緣。近緣とは如來と衆生の信念の心とは最も近接し不可離の因緣あるを云ふ。如何にとなれば、實は如來は肉眼の對象に非ずして直觀すべき靈體である故に、若し全く見佛するに曼んでは自己の靈なる能觀の心と、所觀の靈相とは一體である。能觀の心も實は法界周徧にて所見の相好身も法界周徧なり。故に其の接近不可割の因緣は毫の隙もなし。されば聖善導が衆生佛を見んと欲すれば佛自前に現れ玉ふ故に近緣と名づくと。能見心と所見の靈相との關係は何物も其隙に入りて障害する能はず。亦いかに廣大の佛身も我等が心には觀じ得らる。

或禪僧曰く本來彌陀我胸方寸に在り何ぞ外十萬億の彼方に求めんと詰るあり。予曰く師が心は胸三寸と云ふけれども若し全く三寸の外は自已の外ならば今汝が室內の物を見る是胸三寸の中なるか將た外なり哉、若し心三寸ならば室內の物を知る由なし。今我彌陀と我等念佛者の心的關係は全く彌陀十萬億土に在りて而して我心內、我心內に在りて全く十萬億土なり。觀經に彌陀尊を說く身の丈六十萬億那由多恒河沙由旬と斯の如きの大身を觀せんには十萬億土の此方に在りて瞻仰するが適當の位置なり。されば「念佛者の心本尊は六十萬、十萬億の奧行の堂」若し能く此理を會得せば念佛者と如來との接近不可離の眞理なること疑はざらんと。

三、增上緣。增上緣とは念佛心と如來の恩寵との因緣は如來には非常に强き助成の力あるの義なり。故に衆生に如何に業障罪障深重なりとも全く如來の恩寵の前には消滅せざるを得ぬ。喩へば衆生の業障罪障煩惱等は闇黑なり。闇黑は如何に深重なるも光明には照破せらる。又衆生は赤子の如く如來の恩寵は慈母の如し。子の成長するは全く母の力なり。自己は無力にして彼方は大なる增上の力を以て緣成すること、衆生には汚と惱と悶と罪とがいか成る人も本來具してゐる。煩惱の垢質あるが故に凡夫は靈德圓滿なる佛が現前せぬ。如來は衆生の母として衆生の取り除くべき垢質を脫却して佛の子としての靈德を長養し玉ふに增上の力を有す。衆生の六根は常に色聲香味の五塵の爲に汚さるゝ、恰も身體に垢つく如く、垢を去るに清き水を以て洗滌する如く

に、如來は清淨光を以て人の六根を清淨にす。凡夫の感情には憂、悲、苦、惱を有て居る、之を煩惱と云ふ。世の人は愚かにして謂へらく、人は唯物質に於て滿足なれば心は常に安穩なりと。然らば世には物質に何の不足なきに拘らず精神常に憂悲恐怖の斷えざる者あり。眞の平和と滿足とは實は精神にあり。若し彌陀の歡喜光に充滿さるゝ生活に入る時は、心廣く體肝かにして心に法喜の悅び極りなきを感ずるに至らん。又人の智力は闇く本來無明なり。生の從來する處死の趣向する處を知らず、明日己が身に如何なる祥不祥あるを先知するの明なし。故に人は惑ひ易し。吉凶禍福に對しても或は宿命なりと思ひ又は方位又は年廻等との迷信に陷り易し。皆是無明の致す處、若し如來の智惠光を被りて知見開く時は、物に迷はず、すべて如來に一任し、人生の自覺光明中に有終の美を信じ、如來の實在を信じ、又他を敎へて宣傳するに至る。人の意志は薄弱にしていかに豪傑も肉欲我欲の己には克ち難し。此の弱き我を復活せしめて眞善美の理想界に向つて向上の一路に進ましむるは如來の不斷光なり。斯の如く本來人間は染汚、無知罪惡、苦惱の弱點は本來具してゐる。是卽ち宗敎の要ある所以なり。されば如來は淸淨智慧不斷歡喜の光明を以て人の弱點垢質を脫却して人の精神を淨化し知見を開き正善に化し正善と靈福に善化する處の增上緣なり。

如來は衆生を子として凡ての人間的の弱點を脫却して佛の子として靈德を育みて而して靈的に健全にし父の完き如くに完からしむる增上の緣なり。

彌陀の應現たる佛陀

彌陀は法界最上に存在する中心本尊、十方一切諸佛の本佛、例へば太陽の光明赫々として諸の星宿に反映せる如く、彌陀の萬德圓滿なる光明は一切諸佛に顯現す。釋迦天尊の如來の德を行じたまふとは是なり。彌陀の神聖正義の光が人佛釋尊の身に現じたるに外ならず彌陀は太陽にして釋尊は淨滿月の如し。彌陀の三德に充滿せる釋尊なれば神聖と正義とを以て靈格の威嚴威神光明極りなし。實に神聖にして犯す可からざ

る威德を備へたまふ。恩寵としては太陽の熱線の如く、大慈悲のミオヤとして衆生を悉く一子の仁慈を以て慈しみ心靈を育みて、完きに向上せしめたまふ。

天に在りては無量光、地に出ては釋迦、釋尊の人格の圓滿なるは卽ち彌陀の靈德、若し釋迦を宇宙大に廣くすれば彌陀なり。彌陀を人格に現すなれば釋迦なり。天地處を異にし大小顯現を異にするも、同じく大靈德如々の來德なり。故に如來德を行ず。如來の德とは太陽の萬物化育を德とする如く、彌陀釋迦は一切衆生の心靈を常恒に攝化し靈育したまふを如來の德と名づく。

應身の天尊行如來德

今正に現存の釋尊が天尊行如來德とは佛陀は地上に現はれたる天尊卽ち彌陀の應權である彌陀の身口意三輪の萬德四智三德を擧げて人身の佛陀と現じたので、大小無礙佛陀は形は人類に應現したるも其內證の心に卽ち無量無邊萬德圓滿全宇宙に周徧す。萬德重々無上の靈德を彌陀の四智神聖正義恩寵の三德、法身般若解脫の三德、乃至無量の德悉く具備して釋尊と現れたり。應身天尊、天は第一義天、天然自性、三性一體、造作の得べきにあらず、本有佛陀無作の法身、卽ち十方三世三身卽一如の靈體、如々の機に應じて來るを應身の天尊とす。

應身如來德無量なり今十力四無畏十八不共法を擧ぐ。十力とは佛實相を體得し一切に了達し能く壞るものなく能く勝るものなし故に力と名づく。

一、知是處非處智力。如來は一切の因緣果報に於て審かに能く知り玉ふ。善業を作つて樂報す、之を是處を知るとし、若し惡業を作ては樂報を受ること是處り有ることと無し。是の如く種々皆悉く能く知り玉ふ。

二、知過現未來業報智力。如來は一切衆生の過現未三世の業緣果報を悉く能く知り玉ふ。

三、知諸禪解脫三昧智力。如來は諸の禪定に於て自在無碍其深淺次第を悉く能く知り玉ふ。

四、知諸根勝劣智力。如來は諸の衆生の根性の勝劣大小を悉く能く知り玉ふ。

五、知種々解智力。如來は諸衆生の種々の欲樂善惡の不同を知り玉ふ。

六、知種々界智力。如來は世間衆生の種々界分不同を知り玉ふ。

七、知一切至處道智力。如來は六道は有漏の行の至る處、涅槃は無漏の行の至る處と如實に知り玉ふ。

八、知天眼無礙智力。如來天眼を以て諸の衆生の生時善惡業緣等を悉く無礙に知悉したまふ。

九、知宿命無漏知力。如來は諸々の衆生の一世乃至無量世、死此生彼、姓名年齡等を如實に知り玉ふ。

十、知永斷習氣智力。如來は一切の煩惱と餘の習氣分永く斷して生せざる故に。

十八不共法。不共とは佛陀の智內に充ち無量の德外に顯はる、一切功德智慧が凡夫二乘及諸菩薩と共に有らず。

一、身無失。佛無量却來、常に戒定慧慈悲を以て其身を修め諸功德滿足する故、一切煩惱俱盡の故に、

二、口無失。佛無量智慧辯才具して所說の法衆の機宜に隨つて皆證悟を得せしむ。

三、念無失。如來諸の甚深禪定を修めて心散亂せず、諸法に於て所著なく第一安穩處を得たり故に、

四、無異想。佛一切衆生に於て平等に普ねく度心に揀擇なき故に、

五、無不定心。佛行住坐臥常に甚深勝定を離れず。

六、無不知已捨。佛一切の法に於て悉皆照知して方に一法も了知せずして捨るものあることなし。

七、欲無減。佛衆善を具す常に諸衆生を度して心に厭足なし。

八、精進無減。佛身心精進滿足常に一切を度して休息有ることなし。

九、念無減。佛三世諸佛の法に於て一切智慧相應滿足退轉有ることなし。

十、慧無減。佛一切智慧無邊際不可盡故

十一、解脫無減。佛一切執着を遠離し二種解脫を具す一者、有爲解脫、無漏智慧相應解脫、二者無爲解脫、一切煩惱淨盡無際

十二、解脫知見無減。佛一切解脫に於て知見明了、分別無礙。

十三、一切身業隨智慧行。佛諸相を現し衆生を調伏し智に稱ふて一切法を演說し其をして悟入せしむ。

十四、

十五、一切意業隨知慧行。佛淸淨意行を以て智に隨て衆生心に入つて爲に說法無明を除く。

十六、智慧知過去世無礙。佛智慧過去世の所有一切若衆生法、若非衆生法、悉徧知無礙。

十七、智慧知未來世無礙。佛智慧未來世の所有一切を照知し若衆生法、若非衆生法悉能知。

十八、智慧知現在世無礙。佛智慧現在世一切所有若衆生法若非衆生法悉能徧知無礙。

眞如とミオヤ

問。大乘佛敎では一切衆生の生れ來る元因を眞如又は阿賴耶を根本とす。眞如緣起、賴耶緣起等と說て居る。今ミオヤ(法身)を一切衆生の根本と云ふは通じて佛敎の說に戻るにあらずや、いかに。

答。佛敎に哲學(聖道)と宗敎との兩面ありて若し哲學的には眞如緣起の衆生と云ふ。同じ體なれども宗敎の方からはミオヤに產れ出でたる子等と云ふ。

問。宗敎と哲學とは同じ物を異なる取扱をなすは何如に。

答。宗敎は今現に救を求める自己が生命ある苦樂を感ずる人である故に、救を仰ぐ對象も、此方の苦に同情のある、而して大自在なる、大威力ある、大慈悲に富める人格的でなくてはならぬ。故に客體なる神(如來)も圓滿なる人格である故に其方に歸命信賴して永遠の生命常住の平和を求む。宗敎は救度を求むる對象とし、哲學は神は如何なるものなるかに對する知識の要求より來る。若し宗敎卽信仰の對象なる神の性能を分解し研究すると云ふことは、神に對する謙遜の德を敗る恐あり。然れども人の知識欲は本質性能等を研究して見ざれは滿足出來ぬ。夫で宗敎的に云はゞ最尊なる神を暫らく眞如と云ふ一の理體と見て憚りなく研究する爲めに方便して眞如なる理體として取扱ふのである。

問。何故に一つ對象を兩面より取扱ふ。

答。宗敎は自己生命の救濟を仰ぎて信仰の對象とす。故に光明赫耀として最尊き神格と觀る。

哲學では眞如なる不思議の理體として夫れを知得するを目的とす。故に宗敎の尊き色彩を除いて見る。

問。或る淨土宗の學者の說を聞くに衆生を終局に救濟するは報身の人格を仰ぎ衆生生起の根本は眞如緣起とは、始終一貫せぬやう、いかに。

答。問の如く相當な學者でも、宗教と哲學との取扱ふべき兩面を明瞭に覺知せぬ故に、兩方混雜して始終一貫せぬ。故に終局に攝取する報身如來は光明赫々たる宗教的の神格と仰ぎ乍ら、其衆生の根本緣起の方は眞如なる一の理體より緣起したる衆生と謂て居る。彼等は喩へて云はゞ家庭にて親が其四五歳の嬰兒に戯れて爾は本木の股から生れたのを赤子の折に拾得し來つたのである。今は人間の子なれども本は木から生れたのであるとの戯言に類して居る滑稽學者が少くない。

問。法身は人格に非ずして理體と學者が云ふ。いかに。

答。已に法身と云ふ。身と云ふ人格的に名づく。故に眞如は哲學的にして、法身と云はゞ宗教的にして、前者は理的、後者は人格的に觀るの異あり。宗教は先に云ふ救を求むる自分が生命あり感情ある人である故に、其人の本である故に人格でなくてはならぬ、即ち絶對人格である。密教の如く宇宙全體の物質は絶對人格の身體にして全一の心である。故に宇宙全體が身と心との不二一體なるビルシャナ佛なる絶對人格者である、法身を理體とするは矢張り混雜したる說である。但し法身とは哲學に謂ゆる眞如の理體に名づく。

問。法身と報身と宗教的に觀る時はいかに。

答。生命ある人格なる自己の信仰に仰ぐ客體なるが故に、根本に於いても、現に自己の根本の故に、産生れたる子が人なれば産出す親も人格的でなくてはならぬ。故に法身なる人格、即ち絶對人格、宇宙の全體即ち人格である。故に宗教心を以て觀る時は、宇宙は無意味の理體とは感ぜられぬ。實に慈愛に富める、無限の力ある、一切智なる靈的人格と信ぜざるをえぬ。

世に佛教を唯眞如なる文字にのみ囚はれたる、謂ゆる寒巖枯木に附着する底の學者には、冷かなる觀念にて宇宙を觀るが故に、慈愛に富める人格的に感ずる事はできぬと思ふ。

法身なる絶對人格に産生されたる一切衆生なる子は、少さくも全體を縮少せる性あ

る故に、小法身小造化と云ふことを得。小法身なる子等は報身の慈悲と智慧の光明に攝取靈化せる時は佛性の卵が孵化してミオヤより受けたる靈性も開發靈化して法身から受けたる靈性を完成することを得。

法身より産生れたる子の故に報身の光明に攝化せられて靈格が完成すると云ふは、是宗教的に始終一貫したる說である。

問。(眞如隨緣)宗教は人格的に親子關係を以てミオヤより産出され又ミオヤの慈悲の懷に抱かると云ふが、哲學では如何に說明するや。

答。佛教哲學に數派あり。其學派に依つて其說一ならず。若し起信に依れば、眞如隨緣して衆生と爲る。即ち眞如自性を守らず隨緣して衆生と爲ると。衆生は本眞如から隨緣して衆生の身と爲りしことなれば、若し自己の根本自性は本來眞如なりとの眞如觀を修して全く眞如に證入する時は衆生なる皮殼は脫して本性の眞如のみ了々と顯示するは、既に成佛すゝ。是哲學的方面の解脫である。

法性法身と方便法身

無量光壽尊に法性法身と方便法身との二種法身ましませり。法性法身とは本覺の自性、天眞如來、始もなく終もなく、永恒自然の法身なり。修證を藉らず。方便法身とは衆生を度せんが爲に方便示現の身。

過去久遠の定光如來より乃至世自在王佛に至るまで悉く本佛の分身なり。

方便法身とは無明生死の衆生を救靈の慈悲を示して法藏菩薩の因地に世自在王佛の所に於て、諸佛淨土の國土の廉妙、人天の善惡を觀見して無上の大願を發し、超世の弘誓を發し玉ひ、五劫に思惟して無量永劫の修行によりて顯現せしは即ち無量の光明永遠の生命とを證得したり、これ即ちあみだ如來なり。

あみだ如來とは所證の法體にして能證の人と所證の法と一體不二の法身なり。これを法性身の本覺と方便法身の始覺と冥合し始本不二の法體をあみだ如來とは名づくな

り。本來あみだとは本覺自性天眞の理にして法藏菩薩無量永劫の修行によりて證明し玉ふ眞理なり。

あみ法身は本來自然の永劫本然の理體にましませども、法藏菩薩因圓果滿の曉に此眞理を開示悟入し玉へるなり。然れば能證の人をもあみだ如來とは號すなり。

本覺の光明普く十方法界を照して歸命信念の衆生を攝して始覺せしむ。

普ねく、無量、無邊、無碍、の光明は是如來の體、相、用にして、卽ち法身と般若と解脫との三德として普く法界に周遍せる法體なり。如來三德の光明に衆生を攝取し同化して始本不二の覺を悟入せしむる時は、能所一體となるが故に無碍光とは名づくなり。

衆生本法身を體としながら、無明煩惱に蔽障せられて永夜に迷沒し、生死の苦を受く。この垢障を照破するを炎王光と名づく。斯靈光に接觸するものは三垢消滅し身心共に靈化して聖なる淸淨、歡喜、智慧、不斷の光明は衆生の感覺と感情と智力と意志とを開展し靈化するの靈能なり。難思と無稱と超日月光とは衆生信念の進趣に對して喚起と開發と體現との三階級に對する光明なり。

斯靈光に對するもの、一切衆生解脫靈化せざるなし。慈父大悲の本願は、光明名號を以て十方を攝取す。衆生至心信樂欲生の心を因とし、衆生心と如來心と合一契合して卽ち三昧發得し、靈應交換する時、一大生命に復活す。智悲光明益々加はり、等正覺を成じ、大涅槃を得るは是信仰の妙果なり。如來の本願ここにあり。

大正十三年二月二十日印刷同月二十五日發行
誌代年七冊壹圓貳拾錢　年十二冊貳圓
編輯兼發行人　山崎辨成
印刷人　東京市小石川區表町一〇八番地　中橋昌平
發行所　東京市小石川區水道端二丁目四十四番地　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番